

山田 進一¹ 寺島 吉保² 長宗 雅美³ 高井 恵美² 赤池 雅史² 佐野 勝徳³ 高塚 人志⁴
 1.徳島健生病院 2.徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部 医療教育開発センター
 3.徳島大学 全学共通教育センター 4.鳥取大学医学部 総合医学教育センター

1. 目的

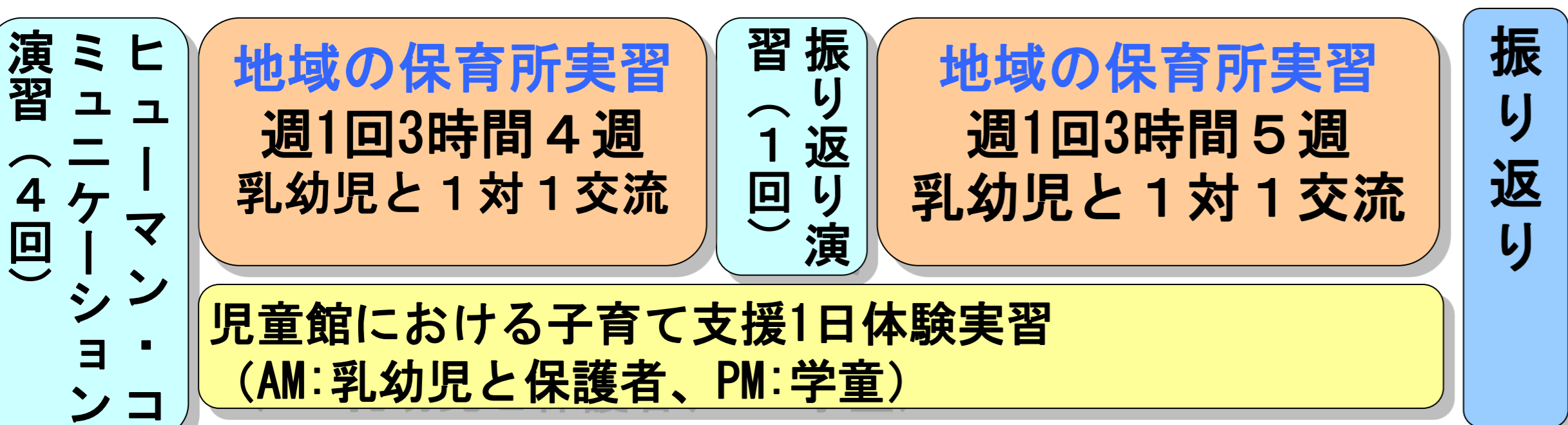
・我々は、2006年後期から乳幼児との継続交流を組み合わせた体験型コミュニケーション教育『ヒューマン・コミュニケーション授業』を行い、学生はこれまでの授業では見られない気づきを得ている。

交流を単なる経験に終わらせない仕組みのひとつに、省察の機会を準備することがある。体験したことを自分の言葉にして書くことは、経験を追体験し、新たな視点から体験を振り返ることで、気づきを深められることが期待できる。

今回我々は、体験後できるだけ早い時期に振り返ることが重要であると考え、直後に短い感想を学生に課した。これまで授業を終えて持ち帰って書かれてきたレポートと比較し、検討したので報告する。

2. 対象と方法

実習：平成20年度後期は、毎週木曜日1回3時間の1対1の保育所実習を10回体験している。実習前に鳥取大学医学部の高塚先生の講義を引き続き、徳島大学医学部教員による学内演習を行う。実習中間期に振り返りの学内演習を行い、実習後に振り返りを行った。



【対象】平成20年度後期に授業を履修した医学生53名(男35名 女18名)を対象とした。

【方法】交流後、終わりの振り返りの会の前の5-10分の時間にB6の用紙に自由記載で3行以上書くことを指示した短い感想(以下直後レポート)を書くことを課した。それとは別に、翌日に提出期限を設けた振り返りレポート(以下本レポート)を課した。レポートの文章に対して、小林ら¹⁾の方法に準じてレポートの分析を行った。なおレポートの分析に関しては、中村ら²⁾の報告にある分析表(下表)を参考に、学生が関与した対象(A:「自分」B[他人]C出来事や理論など「その他」の三つの対象)と関与ステージ(心理的不自由・知的・抽象的から心理的自由・体験的・具体的レベルへ1~4段階)について分類した。レポートの文章の中で関与対象別にもっとも心理的自由度の高いステージをそのレポートの関与対象別の到達関与ステージとした。

考えや感情	関与ステージ(心理的自由度)			
	ステージ1	ステージ2	ステージ3	ステージ4
	不自由←-----視点の移動-----→自由			
関与対象	頑固さ 抽象的、理論的表現	混乱と動揺 感情の動きがある	苦悶と閃き 実践してみる	柔軟さ 具体的、体験的表現
A自分	体験学習への期待や不安 自己防衛	知的混乱、行き詰まり	瞬間的気づき	新しく気づいた自分について述べる 将来への積極的意欲
B他人	他人に対する判断	他人の言動感情が理解できない 他人の言動の解釈	他人の言動、考え方をそのまま理解したいと思う 他人の感情をそのまま理解したいと思う	他人の生きている世界をそのまま認められる 他人に対する尊敬と感謝
Cその他	プログラム、技法、方法に対する批判評価	理論、技法が理解困難 自分の価値観による解釈	理論的理的な理解 自分の価値観への固執からの解放	理論が技法ではなく、人間中心であることへの知的気づき

4. 結果

1)53名交流9回の提出レポートのうち、欠席やレポートの未提出、紛失などがあったため、直後レポート、本レポートがそろっている438レポートを対象とした。

総直後レポート、総本レポートにおける関与対象の到達ステージの合計を以下の表に示す。

関与対象	直後レポート				本レポート			
	ステージ1	ステージ2	ステージ3	ステージ4	ステージ1	ステージ2	ステージ3	ステージ4
A自分	10	165	149	51	1	40	250	140
B他人	17	102	118	31	1	78	204	143
Cその他	9	7	11	0	0	1	30	12

レポートあたりの関与対象の数は、直後レポートでは1.52対象であったが、本レポートでは2.05対象と本レポートが多く対象についての記載していると考えられた。また、本レポートは直後レポートと比較して、どの関与対象においても到達ステージが高いレポートが多く認められた。

2)次に学生ごとの変化について検討した。

①一回のレポートの関与対象ごとの到達ステージ数の合計をレポートの点数として検討を行った。たとえばあるレポートの関与対象Aの到達ステージはステージ2、Bはステージ3、Cは記載なしの場合、2+3+0=5をレポートの点数とした。一人の学生ごとに9回の直後レポートと本レポートの平均を求めた。

②同じ交流時の直後レポートと本レポートを関与対象ごとに比較し、到達ステージが下がっている場合は-1点、変化がなければ0点、あがっている場合は1点とし、その合計をレポートの変化点とし、平均を求めた。

		直後	本	差
1	A	2	3	1
	B		3	1
	C			
2	A	2	4	1
	B	2	3	1
	C			
3	A		4	1
	B		3	1
	C	3		-1
4	A		4	1
	B	3	3	0
	C			
5	A	2	3	1
	B	3	4	1
	C			
6	A	4	4	0
	B		4	1
	C			
7	A	4	4	0
	B		3	1
	C			
8	A	4	4	0
	B		4	1
	C			
9	A	3	4	1
	B		4	1
	C			
平均		3.56	7.22	1.44

		直後	本	差
1	A	2	3	1
	B		2	1
	C	3		-1
2	A	2	2	0
	B	2	2	0
	C			
3	A	2	3	1
	B	2	3	1
	C			
4	A	2	2	0
	B			
	C			
5	A	3	3	0
	B	2	3	1
	C			
6	A	3	2	-1
	B	1	2	1
	C			
7	A		3	1
	B	3	2	-1
	C			
8	A	4	3	-1
	B	2	2	0
	C			
9	A	4	3	1
	B		3	1
	C			
平均		4.11	4.78	0.56

直後平均	本レポート平均	変化 平均
3.94	6.51	1.18

本レポートの平均は直後レポートの平均より有意に大きくなっていった。変化の平均は1.18であった。これは各回で、一つ以上の関与対象で到達ステージが1以上高くなっていることを示している。本レポートの内容は、直後レポートの内容を踏まえたものが多かった。ただし、直後レポートにはその日に行ったスケジュールに関する内容など、その他に分類されるものが書かれていることがあり、それに関しては、本レポートに触れない場合が見られる。

全体を変化の大きかったグループと変化の小さかったグループに分けて検討した。それぞれのグループをさらに、直後レポートの平均点が、全体の平均より低いか高いかでわけ、4つのグループにした。

	人数	直後平均	本レポート平均	変化 平均	期限内提出数
変化少平均低	11	3.31	5.30	0.91	8.91
変化少平均高	15	4.82	6.32	0.75	10.53
変化大平均低	14	3.02	6.68	1.53	11.14
変化大平均高	13	4.45	7.57	1.54	11.9

変化が少なく、直後の平均も低いグループは有意に期限内にレポート提出できた回数が少なかった。つまり、授業に対するモチベーションが低いもしくはレポート作成意欲が引く可能性があると考えられた。

5. まとめ

1. レポートに書かれる関与対象は、直後レポートより本レポートの方が多かった。また、到達ステージも本レポートが高い傾向がみられた。
2. 学生個別に検討した場合も直後レポートよりも本レポートに到達ステージが有意に高い結果となった。
3. 直後レポートと本レポートの到達ステージの変化が少ない群は、期限内にレポートの提出が有意に少なく、授業に対するモチベーションが低いもしくはレポート作成の意欲が少ない可能性が考えられた。

6. 考察

振り返りを気づき多いものにするためには、①新しい視点に気づくような質問項目の設定、②振り返りための時間を確保、③体験の記憶が新しい時期での記載を促す、④振り返りに対してコメントをする、⑤時間をおいて学生が振り返る機会を設定するなどが上げられる。今回、直後に感想を書くことで、その後の振り返りが豊かになることを期待した。しかし、今回の評価方法では、その影響を測ることは困難であった。レポート作成意欲が低い学生が、振り返りの機会を持てる工夫が必要である。

参考文献

1. 小林純一ほか、マイクロ・ラバトリー・トレーニングにおけるグループプロセスの分析研究、相談学研究1976-1978
2. 中村千賀子ら「個人特性から見た「学外体験学習」の効果、東京医科歯科大学教養部研究紀要第27号1997年3月

乳幼児との継続交流を組み合わせた 体験型コミュニケーション教育(第6報) ～授業の Informal Effect～

長宗 雅美¹ 寺島 吉保² 高井 恵美² 山田 進一³ 赤池 雅史² 佐野 勝徳¹
高塚 人志⁴

1.徳島大学 全学共通教育センター 2.徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部 医療教育開発センター
3.徳島健生病院 4.鳥取大学医学部 総合医学教育センター

はじめに

我々は文部科学省平成18年度大学改革推進事業「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」の補助金を受け、平成18年度後期より平成20年度まで、乳幼児との交流実習を組み合わせた体験型コミュニケーション授業を実施してきた。事業終了後は全学共通教育の授業として現在も継続している。

この授業は子育て支援による地域貢献を通じて医療系学生における人間性教育の改善を行ない、人間力を向上させることを目的としており、鳥取大学における高塚氏らの『ヒューマンコミュニケーション』授業を参考に企画された。乳幼児との継続交流を通し、相手の気持ちを察する感性を磨き、自己肯定感や役立ち感を体験してゆく過程で、人間力を培おうとするものである。

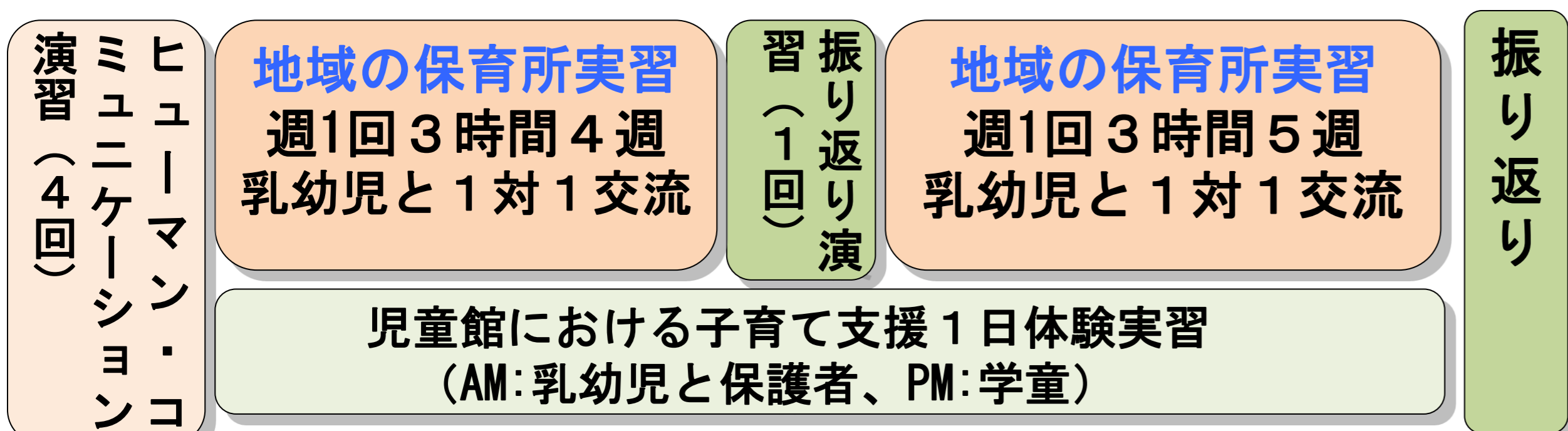


1 目的

3年間の実践を振り返ると授業だけでなく「研究室」を通しての担当教員と学生とのかわりか予期せぬ効果をもたらしていた。この授業の Informal Effect について検討し、報告する。

2 概要

授業の組み立て(全16回の授業を次のように組み立てている。)



担当教員:非常勤講師1名(医師)、特任助教2名(看護師、保健師)
研究室:現代GP専用の研究室1室(25㎡)

2 対象と方法

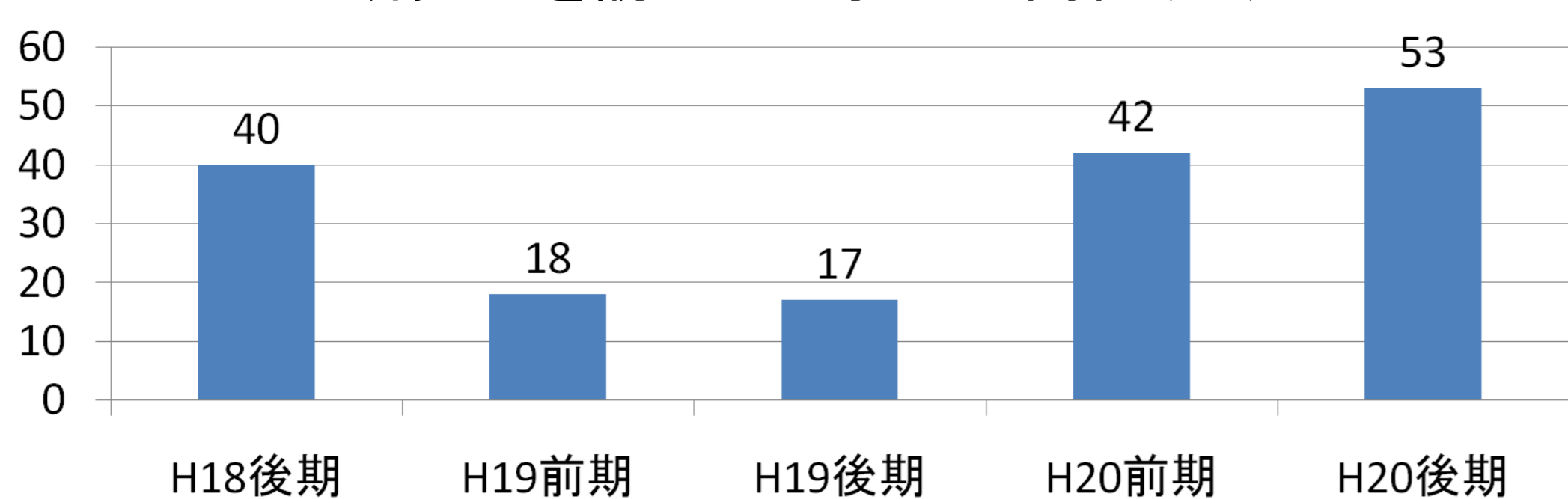
【対象】平成18年度後期受講 医学科1年生20名
平成19年度前期受講 医学科1年生45名
平成19年度後期受講 医学科1年生53名
平成20年度前期受講 医学科1年生45名
平成20年度後期受講 医学科1年生53名 合計216名

【方法】3年間の担当教員と学生の交流件数、交流事例経過、徳島大学学生生活実態調査結果をもとに検討した。

3 結果

授業時間以外に研究室を訪れる学生は平均34%で、10%は常連的に訪室した。

＜研究室を訪室した学生の割合(%)＞

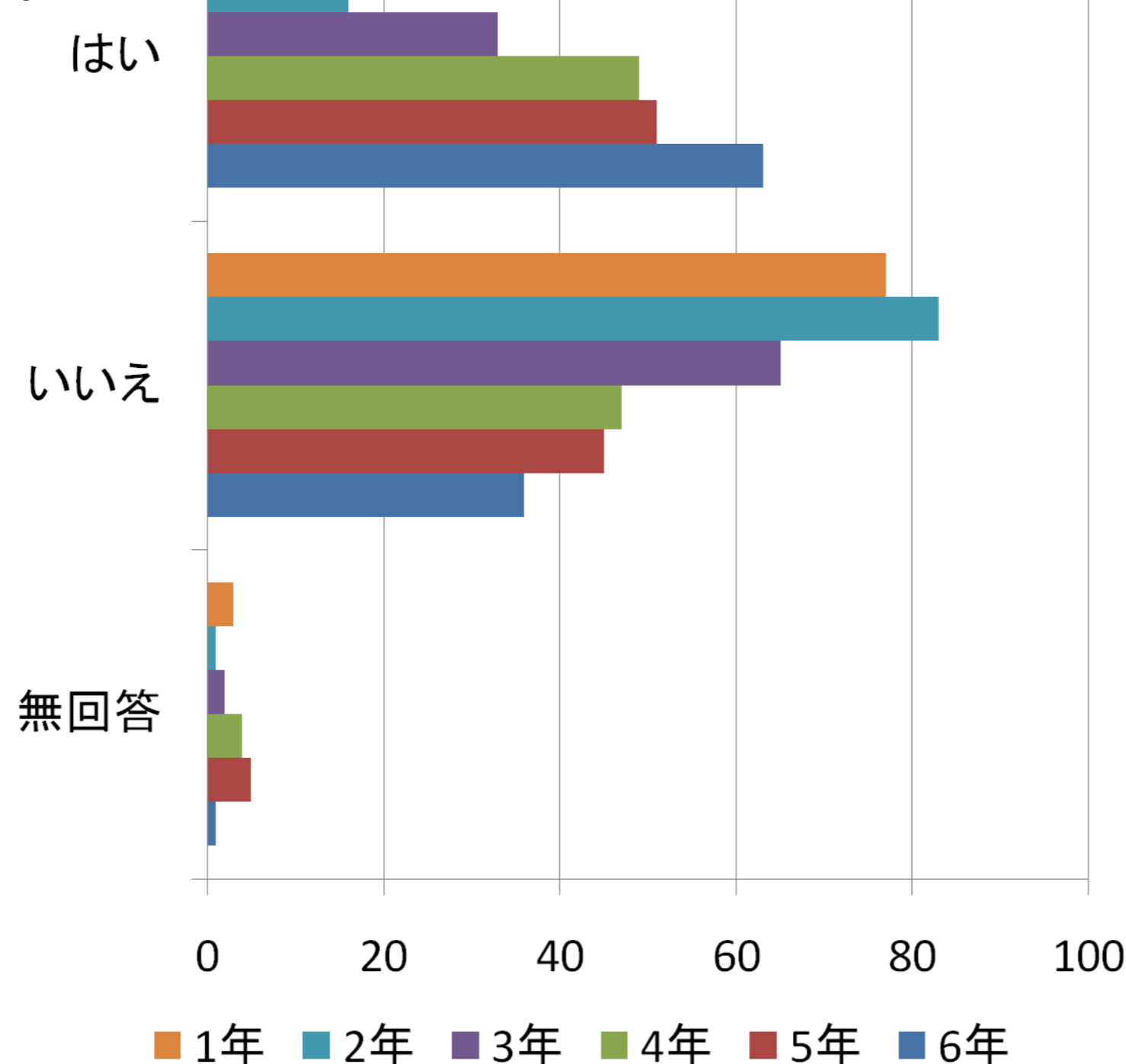
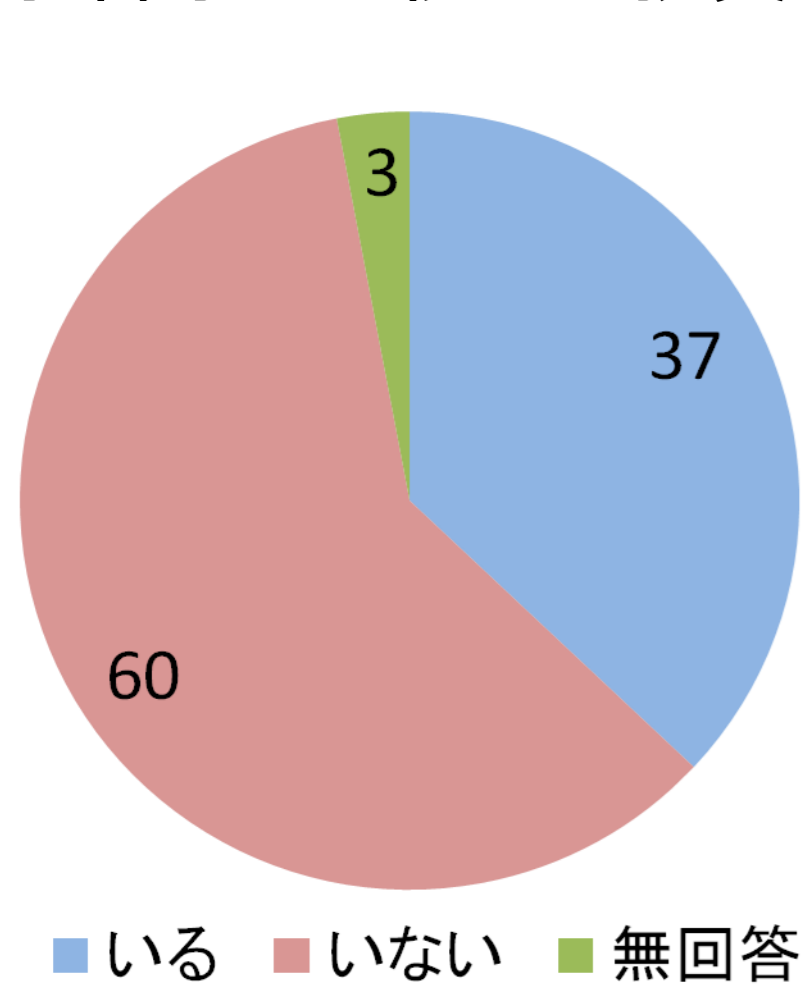


医学科において半分以上の学生が親しい教員はいないと答えており、1、2年生では特にその傾向が強い。

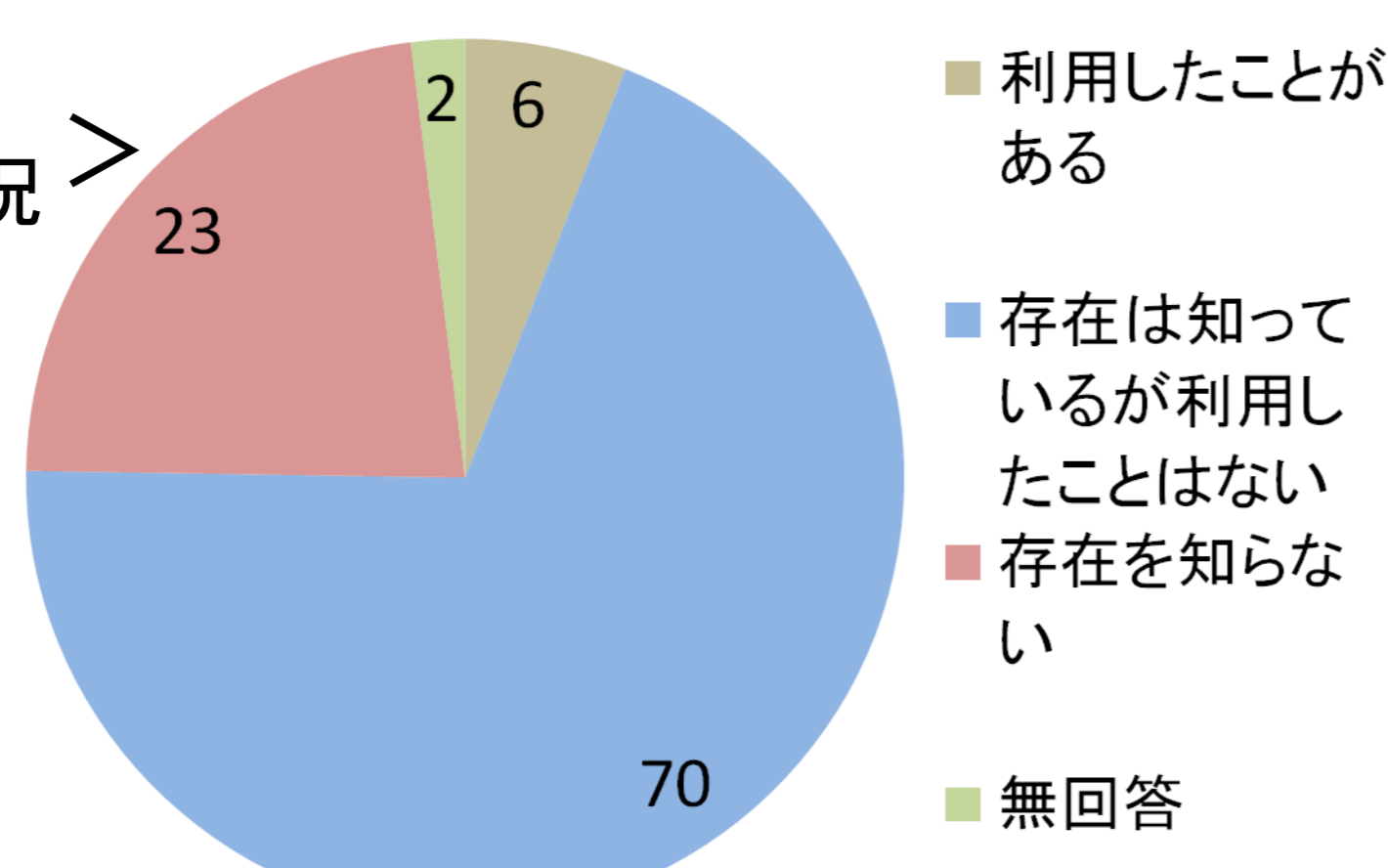
また学生相談室を利用したことがある学生は6%で、23%はその存在も知らなかった。

＜学年別 親しい教員の存在＞

＜医学科学生 親しい教員の存在＞



＜医学科学生 学生相談室の利用状況＞



レポートを提出しに来たり、遅れている課題を済ませたり、空いた時間を過ごしに訪室する学生が、様々な話をしていた。

＜相談、情報事例＞

男子	入学前にうつで治療していたことがある。最近朝、なかなか起きることができず、授業に遅刻してしまう。
男子	授業を欠席がち。友人が代返したりして過ごしているが、医学部が本来希望していた進路ではなく、悩んでいる。
女子	友人とシェアして、部屋を借りたい。親は友達と住むことに反対している。どうして…
男子	現在自宅通学。家を出て、ひとりで暮らしてみたい。奨学金もらえばやっているとと思うんだけど、親はそんなことで借金するなって…
男子	再試験が危ない科目がある。教授と話がしたいんだけど、どんな服装で行くべき？
女子	浴衣を着て出かけたいんだけど、着せてもらえますか…？
男子	シャツにアイロンがうまくかからないんですけど…
男子	クラス内で新しいカップルができたよ。先生、誰だかわかる？
男子	図書室が混んでいて…ここで勉強してもいいですか？
男子	彼女にはピル飲ませてます。僕が買っているんだからいいでしょ…
男子	(深夜)腹痛がひどく、血便が出る。親に連絡したら救急車呼べって言うんだけど、先生どうしたらいいですか？
女子	お誕生日おめでとございます！私が焼いたケーキです。

＜学生による授業評価＞

	H19		H20	
	そう思う	ややそう思う	そう思う	ややそう思う
Q この授業を選択してよかった	90%	9%(合計99%)	90%	7%(合計97%)
Q 実習は満足できた	82%	14%(96%)	78%	20%(98%)
Q 実習での学びは大きかった	90%	9%(99%)	87%	12%(99%)

4 考察

この授業では他の講義では得がたい教員と学生のつながりが見られ、授業外での密な交流を伴うことも特徴的である。自然に教員から学生に近づくことが可能であるといえる。この交流において、授業中には得ることのできない学生の情報を得ることができ、授業における学生の個々への対応に活かすことができた。つまり学生の気持ちを大切にされた声掛けやアドバイスにつながったと思われ、この授業の高い満足度の要素の一部になっている可能性がある。また、教員との交流は、授業での学びを実生活にいかすきっかけともなりえる。

大学生活において教員と学生の関係は、少人数のゼミや卒論指導以外では疎であり、特に初年次教育では少ない。学生支援の窓口として「学生相談室」を設置しているが、利用者は少ない。

親(親族)以外の大人から大切にされる経験は、将来の対人援助の礎になると考えられ、この機能は、授業をより深めることにつながると同時に、学生を支援する思わぬ効果となっていると考えられた。

5 まとめ

この授業で確保した「専任教員の存在」と「研究室」という空間がもたらした Informal Effect は、我々に現在における学生支援のあり方について考えさせる機会となった。

この授業を「人間性を育てる一つの授業」としてだけ捉えるのではなく、ここで得られた貴重な情報を活かし、今後積み上げられてゆく専門教育や卒前臨床実習、卒後研修への足掛かりとして機能させてゆくことができれば、学生の成長をより支えられるものとなるだろう。

今後の医学教育を支える土台としてこのような機能について検討する価値があると考えた。

参考文献

・キャンパスライフ 徳島大学第23回学生生活実態調査報告書